

その前に集まつてゐる四五人の子供の姿を認めた。何気なく五六歩行過ぎた時、ふと妙な聲が耳に入つた。女の子が役者のやうな聲を出して何か云つてゐる。すると其男の子が又同じやうな聲でそれを受ける。賢吉は思はず足を留めてその方を眺めた。女の子は十一二で、男の子の方はそれより一つか二つ下らしい。今三人廻りを取巻いてゐるのも大抵同じ位の年ばへである。唐人髷に結つた女の子は頻りと黄色い聲を出して、姿態を作つて男の子に取組らうとする。すると荒い縞の筒袖を着た男の子は、無理に太い強さうな聲をしてそれを拒む。年上だけに女の子の方が遙に器用である。

子供達は賢吉がそこに立つてゐるので、一寸芝居ごつこをやめて怪しむやうに彼の方を見たが、直ぐに又平氣になつて跡を續けて行つた。賢吉は初め何か物乞の類かとも疑つたが、よく／＼見るとさうではない。服装は餘り綺麗でもないが遊び事にやつてゐるに違ひない。それを見てもまだ居る眞似事では

表情の激しい眼を持つた細面の女で、頸筋から肩の邊へかけてのすつきりした様子が心を惹く。賢吉の頬に温い血潮が上つた。と、女は二三歩近寄りざま白い手を暢べて彼の袖を取らうとした。賢吉は驚いて逃げるやうに飛び退いた。

賢吉は又電車に揺られて淋しい自分の家の方へ歸つて行つた。體が疲れたせゐか頭もぼんやりしてしまつた。取留めては何事をも考へやうとしなかつた。只さつき家を出て來た時のやうな、耐へ難い空虚と寂寥の感はどこへやら消えてゐた。

途中下車驛

水野 仙子

間もなく列車が來たので、滿枝は風呂敷包みを持つた手で添一を抱へて、驛夫の開けてくれた三等室に乗り込んだ。

なくて、不斷自分達が喋つてゐることを役者のやうにして云つて見るだけなのである。

賢吉はそれを眺めながら如何にも公園の裏らしい光景だと思つた。大方誰かに伴れられて宮戸座の立見にでも行つて、見様見真似にこんな事をやつて見る氣にもなつたのだらう。藝者、花魁、吉原、銘酒屋の姐さん、活動寫眞……花やかな、併し良もすれば人間の墮落を誘ふ色と匂と音楽とには、生れ落ちてから且暮熟してゐる子供達である。かうして芝居ごつこに夢中になつてゐる最中でも、それ、直ぐ向ふでは闇黒の妖女の誘惑的な聲が恐ろしく響くではないか。

この子供達の小さな胸に潜んでゐる理想の男性とはどんな人であらう。理想の女性とはどんな人であらう。子供達の將來が恐ろしい。賢吉は暗い心持を抱いてそこを去つた。

或家の格子の前に立つてゐた女が賢吉の顔を見て艶やかに笑つた。思はずその方を見返る。二重瞼の

直行の常として手頃の席は皆、長の旅らしい人達によつて占領されて居る。網を見れば網にも、淺黄の風呂敷包みや靴などが一ぱいに揚げられてゐる。足と足の重つた狭い間を、添一の肩を押しながら向ふの隅に進むと、其處に居た商人が脇に置いた大荷物を自分の足の下に下したので、滿枝は一寸會釋して腰をかけた。初めてはつとして自分の前の並びを見廻し、それから憚るやうに背中合せの方を斜めに見遣つた時、滿枝はそのまゝ外らさうとした眼を据えて人の顔を見た。

「あら、ま……」と一寸自分ははつと赤くなつたやうな氣がした。

「お珍らしい」と男は先刻から見付けて居たらしく、體を斜めにして腕をかけてにこ／＼して居た。

「どちらへ」と男は言つたが、直ぐに、「白河へお出でしたか」と續けた。

「は、一寸……」お盆なものですから久し振りで父の墓参りに、とは口に出ずに胸元で消えた。

「おい／＼爺餅！」と突然男の後の男が、大きな聲で物賣りを呼んだ。其時丁度上りの列車もはいつて来て、種々な顔がちら／＼と窓を擦つて過ぎる。其方目目を捉られてから、妙にそびれてしまつて、満枝は前の方にばかり當てどもなく目を置いた。

程なく列車は動き出した。添一は母の膝から手を離して窓の傍にじりよる。速力を増した列車は、河原を越えて低く並んだ町を、容赦もなく飛ばして遙にした。

物見遊山とは違ふけれども、兎に角出掛けるといふことが気分を引き立て、汽車に乗られると前の晩から喜んで居た添一が、飛び廻つて居るのを窺めながら、満枝は其日晴れやかな顔をして家を出た。いつの間にか三日を三年振りで見えた古馴染の町で過して、もの忘れしたやうな、飽氣ないやうな、氣の抜けたやうな心持ちで、今夫の許へ歸らうとして居る。二三の親戚や知己から送られた菓子折だの、添一が貰つた玩具だの、昔のお針の師匠から貰つた半

車の響まで自づと大きな聲も出さなければならぬから、それが一寸極り悪くもある。でなるだけ其視線から逃れるやうに、窓の外にはかり目を遣つた。

此男は満枝が小學の高等三四年であつた頃、一年ばかり雇ひ教員として出て居た男で、一寸容子のよかつたところから、誰と誰はなとよく言ひたがる仲間に見えず、満枝も此男の名と一緒に並べて樂書きされたりした。同級のお轉變連は、此男の姿を廊下に見る度に、「いなさ／＼はらかせふけ！」と大きな聲で囁して笑つた、ある朝登校して見ると、満枝の机の中に無名の手紙がはいつて居て、「有馬山：」の歌が一首書いてあつたのから起つたのだ。

忘れ切つたやうな其頃のことを、満枝は久し振りで思ひ出した。板の樹の下で鬼事をした女の子、不淨なものが落ちて居たからといふので、四年生の講堂の掃除を廢させられたのを、満枝等何も知らぬ連中が揃つて先生の許へ抗議を申込んだりした、それらが曾ての自分であつたかと思ふと、懐かしさ床し

襟だのが、風呂敷包みとなつて膝の上に乗つて居る。顔を出すところで母の話をさるかと思つたけれど、まるで其方には話を還さない人もあり、一寸出ても大抵一言か二言で止めてしまふ。さうされ／＼はされる程また、満枝はなんとなく身の引けるやうな思ひがした。

「お祖母さんはね、餘所の人になつたんだよ」と添一が得意氣になつて言ふと、

「さうけ、餘外のお祖母さんになつたのけ、添坊はお祖母さんが大好きだつたねえ」と白河の年は取つて居るけれども髪などの艶々とした叔母が、お菓子子を紙に包んでくれた。

ほんやりこんなことを考へながら、満枝はふとなんとなく後に氣が／＼りなことがあるやうな氣がした。一寸會釋を交したまゝ外れてしまつて、そのまゝ同じ室に居ながら知らないふりして居るのも異なものとは思ふけれど、改めて體を捻ぢ向けるのも臆怖なやうな氣がするし、人も一人間に挟んでゐる、汽

さに伴つた淡い哀愁も湧いた。

汽車は突然長い汽笛を吐いた。線路に迫つた玉蜀黍の畑の、柔かな赤い毛の子を孕んだ丈高い幹に、風を切る速力を縋のやうに見せて、めまぐるしく馳せたと思ふと、材木などの散らばつて見える小さな驛に列車はいつた。

大荷物を持つた男は其處で降りた。で其空席に荷物を置いて添一を寛げてやつて、満枝は勢ひ口を開かなければならなかつた。

「どちらまでお出でなさいます？」と此頃は土地訛りがうつ／＼尻上りに問ふ。

「福島です。」

「只今福島にいらつしやるんでございますか。」

「えゝまあさうです、この節は吾々の忙しい時で、あつちに一月こつちに一月と渡つて歩いて居ます。」

「あゝあの蠶業のあれで……」と満枝はふと誰からか此人が蠶業巡廻師になつて居るといふことを聞いたのを思ひ出した。

「お久し振りですな」と男は始終莞爾々々として
「なんですか、只今はどちらにお住居です？」
「はアあの二本松に……もう足掛け三年になります
よ」

「さうですか……それは貴女の……ハ、さうに決
つて居るでせうがお幾つです」

「五ツでございます！」

「ふむ、早いもんだなア」と眞實に感心したら

「坊つちやん、面白かつたですか、白河へ行つて、

淋しうな顔をして居た。また暫く話が切れる。

男の目ではよくは解らないけれども、品は兎も角も
すべてに流行を後れた服装は一通りなんとなく身窄
しさを感ぜられる。髪も前髪をつまつた束髪だ

し、襦袢の襟なども二三年前に流行つた色合だと思
ふ。色は昔の通りに白けれど、小柄なのが模素な

着物に包まれて顔くぬげに見える。殊にどこな



く生氣のないやうな、ことによつたら婦人病でいも
あるかと思はれるやうな顔色を見ると、得意でない
今の境遇を察することも出来る。

男はこんなことを考へて居た。満枝の眞實の伯父

で、あとでは父となつた大伴といふ醫師の姿なども

思ひ出した。春の低い、何時も紋付の羽織を突き袖

で歩く人で、満枝は小さなうちからこゝに引き取ら

れて居たのだ。

「あのおツ母さんは相變らずお壯健ですか」と突然

男はかう聞いた。大柄な、艶のいゝ顔の愛想のよか

つた其人を思ひ出したからだ。

「は……」満枝は少からずどきどきした。今も今そ

のことばかり考へて居たところであつた。

母はつひ四ヶ月ばかり前に、長年の獨身生活を捨

て、或る富豪の後妻となつて行つた。それがどう

も満枝には氣がひけてならぬ。何故かそれは自分に

もわかつて居なかつた。父の墓の前に立つた時も、

申譯のないやうなすまない氣がした。添坊もう大

二つばかりの停車場を越すと、満枝の心は何とな

く落ちつかなかつた。家を出る時から其心はあつ

たのだし、昨夜床の中であれこれ考へた末、途中

母の居る町に下車して逢つて行かうといふ心、それ

がまた次が其驛となるととなし躊躇はれる。決

し兼ねるやうである。

「この次が郡山でございましたね」と男に聞いて見

た。

「さうです、お降りになるんですか」と満枝の落ち

つかない顔を見て、持つて居た新聞を下に置いた。

「え、一寸降りてみようかと思ひまして……母が此

節郡山に居るものですから……」

「さうですか、それは……」と男は怪訝な顔をした。

「坊や、お前の大好きな人に會はせてあげようねえ

坊は一番誰が好きなんだつて」

と添一の手を取る。決心したやうに襟など掻き合し

て胸元をしめた。

きくなつたし、私つてものは此家に取つて有つても
なくともいゝ者、邪魔になるとも用はあるまい、そ
れで先様に私のやうなものでも用があるといふなら
ば、私は喜んで参りませう。と言つて行つた人を、
留めることが出来なかつた自分を責めるのか、操を
捨てた母の心を悲しむのか、突きつめて見れば、二
度の嫁入りも一度の嫁入りも、何もそこに變りも差
もないではないかと思ふ。

「おツ母さんが其氣なら何いゝさ」とばかりで、
其外一言も其問題に口を入れなかつた夫を思ふと、
また自分等の仕業が、勢ひ母を嫁かしめるやうにな
つたのではないかと胸が迫つて来る。

かうして満枝はぐちぐちとした態度を取つて居る

うちに、話はさつさと進んで母は去つた。さうして

母が居ないで都合のいゝこともあり、また不自由な

時もありしけれど、概して家の中が寛いだ空氣の

うちに、一月経ち二月経ち、すでにもう四月にもな

つた。



みを止めた。

「郡山！ 郡山！」

「岩越線の方は乗替！」

窓の外車室の中が頻り動揺中を、

「それぢやあ、どうもお世話様になりました」

と満枝は添一を抱へて一禮した。

「や、さよなら、どうぞおッ母さんによろしく」と男も軽く禮を返した。

車夫の圍みをぬけて街の方に足をうつすと、お宮んなさいまし、寄つていらつしやいまし、手前は何屋でございませう、と番頭や女中が聲をかける。そのうちの軒の低い手近な家に満枝は入つた。

「いらつしやいまし……」

「お疲れさま……」とばた／＼草履の音をたて、襷掛けの女中が洋傘と風呂敷包みを取つた。

薄暗いやうな、軒に硝子の風鈴の下つた部屋に導かれて、手持無沙汰に満枝は坐つた。

「ホ、おとなしうござんすね」と煙草盆やお茶

にした。

女中が出て行つた後、満枝は初めて座蒲團を引きよせて坐つた。

「お祖母さんはどこに居るの？」と氷のコップをつついて居た添一が匙を嚙へて顔を見あげた。

「お祖母さんかい、お祖母さんは今にこゝに來るの」とは言つたものの、果して慥に來るかどうかはわからない。丸木といへば町でも一二の富豪ではあるけれど、永年床の中では暮らしたヒステリー症の家付きの妻が死んでから、間もなく迎へられた後家。主人はまだ采配を振つてくれるけれども、もう餘程の老人で、しかも若主人なども賛成でもなかつた縁談なのだ。金ばかりも樂は出來ない。召使ひのものなぞにも勢力がないだらう。と思ふと母の身が氣の毒にも思はれ、女の行末といふものが哀れ深く考へやられる。肩書きのない醫者のこと、思はしくない夫のこの頃の事業、今の土地にも永くは居られないやうな氣がするけれど、何地に行つたてさう自分の身の浮ぶ瀬が來やうと思はれない。そこを抜け

を持つて出た女中に、

「氷でも取つてやつて下さいな」と言つて、満枝はさてこれから如何しやうと思つた。電話——とも思ふけれど、田舎に居てもそれも扱ひつけないから厭な氣がする。

「すみませんがねえ、巻紙と封筒を借して下さいな」と女中に氣の毒さうに言つて、

「さうしてね、お氣の毒だけれど、誰れか丸木に持たしてやつて下さい」

「へえ、あの丸木……本家の方でございませうね」と女中は其處に踞んだ。

「父上の墓參に白河へまゐり候、今日二本松へ歸るところに候へども、添一にお祖母様お目にかゝりたく候故、一寸下車致し候。お都合宜しくは停車場前の○屋方へお出で下され度願ひあげ候。満枝よりおきの様」

と書いた。母上様と書かうとしたけれども、おきの様と書いて、またそれを消さうとして、やはりそれ

出した母は伶俐なのか——併し今の境遇も大抵ではあるまいと強いてさう同情する、

ふと三十六だつたか七だつたかと母の年を考へて居るうちに、二人が顔を合した時の心持ちや有様を思つて、あれこれと其時のことを想像して見た。上から下まで新しい縮緬づくめ、それはきまつてゐるとしてそれを羨んでは澄まぬ。その美しい着物の中に母の涙が含まれてゐるのだと、何故かさう思つてゐる。

「満枝」と言ふか、いや——

「お、添坊」と言つていきなり涙をほろ／＼と澄す……自分もたゞ黙つて涙ぐむ……こんなことを思つて満枝は恰もそれが眞實であつたかのやうにかすかに涙ぐんだ。

車の音がした。草履の音や賑やかな挨拶の聲が店から聞える。

「お待ちかねでございます」といふのでふと耳をたてた。そのうちに交つて、何か高やかに言つて笑つた聞き覚えのある聲が聞えた。と思つた刹那、今の今までとは違つた思ひの涙となつて満枝の頬をほろ／＼と傳はつた。

